

<講演抄録>5.MRL/Mp-Ipr/Ipr マウス関節炎の骨破壊性病変に関する電顕および免疫組織学的検討(第22回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	成田 憲司, 中村 雅典, 森 士朗, 小坂 浩美, 手島 貞一
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	12
号	1
ページ	80-80
発行年	1993-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/31449

影響するといわれている圧縮強さについて実験しているものは少ない。しかも、それらは一定温度に係留したもので、熱サイクルを加え調べているものではない。そこで接着性レジンセメントを含め各種合着用セメントの圧縮強さについて、前報よりもセメントの種類を増すと共に、熱サイクルの回数も60回から6,000回に増やした実験を行い、前報と比較検討した。実験に用いたセメントは、接着性レジンセメントとしてパナビアEX、スーパーボンドC & B、リン酸亜鉛セメントとしてエリートセメント100、エリートセメント100 Liv、グラスアイオノマーセメントとしてフジボンド、今回新たにカルボキシレートセメントとしてハイボンドカルボセメントを加え計6種類である。実験及び測定方法は前報に準じて行った。《結果》1: 熱サイクルの有無及び熱サイクルの回数に関係なく、一番大きい値を示したのはパナビアEX、次にフジボンド、エリートセメント100、エリートセメント100 Liv、ハイボンドカルボセメントの順に小さくなり、最も小さい値がスーパーボンドC & Bだった。2: 熱サイクルを加えない場合と熱サイクルを6,000回加えた場合を比較すると、パナビアEXとエリートセメント100が危険率1%で小さくなり、ハイボンドカルボセメントとスーパーボンドC & Bが危険率1%で大きくなった。3: スーパーボンドC & Bは変形はしても破砕しなかった。4: セメントの湿度による影響を調べた実験結果、リン酸亜鉛セメントは加湿により、危険率1%で小さくなることがわかった。従って保管状態には十分な注意が必要と思われる。

4. 警察歯科医会について

宮城県歯科医師会 山田文夫

宮城県歯科医師会は身元不明変死体（例えば死体遺棄事件）、仙台国際空港計画による大型機乗り入れ、新幹線通路、仙台市内の高層ビル化を指適し、事故災害時の法医歯科協力医を組織化することを県警本部長に申し入れ、協議の上、宮城県警察歯科医会を設立発足した。

目的（宮城県警察歯科医会会則）

宮城県警察歯科医会は宮城県警察が相互の連携を密にして警察が行う検視、鑑定に際し、法医歯科学的立場から個人識別等の捜査活動に協力、援助し、もって県民福祉の向上に寄与することを目的とする。

新しい時代を迎えて、私共も専門職を通じての社会参加、そして歯科医師会としての社会的な貢献等、今

後地域住民とどのようにしてかかわっていくかが問われている。

5. MRL/Mp-lpr/lpr マウス関節炎の骨破壊性病変に関する電顕および免疫組織学的検討

成田憲司（口腔外科2）、中村雅典（口腔解剖2）森 士朗、小坂浩美、手島貞一（口腔外科2）

関節炎の自然発症モデルであるMRL/Mp-lpr/lpr（以下MRL/l）マウスの骨破壊病変について超微形態学および免疫組織化学的に検討した。

〔材料と方法〕5か月齢の雄MRL/lマウスより膝関節を採取し、関節炎病変部の切片を作製、同部に出現する酸性フォスファターゼ、Mac-1, Mac-2, F4/80陽性細胞等について組織化学的に検討するとともに電顕を用いてそれらの細胞の同定を試みた。

〔結果および考察〕① 関節頭に骨破壊病変が認められ、マクロファージを思わせる単核細胞が集簇していたが、多核の破骨細胞はほとんど認められなかった。② 骨が破壊されている部位の骨表面付近に酸性フォスファターゼ、Mac-1, Mac-2, F4/80陽性の単核細胞が認められた。③ 電顕的に、骨破壊が認められた部位のいわゆる線維性組織と骨組織の境界部において約10 μ mにわたり非石灰化像が観察され、この非石灰化基質に近接してマクロファージと思われる細胞群が観察されたが、多核の破骨細胞と思われる細胞は認められなかった。また、非石灰化骨基質内には径の太いコラーゲン線維が認められたが、付近に骨芽細胞が認められず、骨基質が脱灰された可能性が考えられた。

以上より、MRL/lマウス関節炎の関節破壊をつかさどる主たる細胞はマクロファージと考えられ、これが非石灰化骨基質の吸収に強く関与しているものと考えられた。

6. 実験的辺縁性歯周炎の接合上皮先端での上皮の動態 — とくに AgNORs の推移について

阿部洋一郎、小野寺 健、大家 清（口腔病理）

実験的歯周炎を誘発し、その進行と治癒過程での歯肉上皮の動態をAgNORs数の推移で検索した。材料および方法：成犬ポメラニアン11頭を用いた。対照群、歯肉縁下グループを形成し縫合糸で結紮し1, 3, 6か月経過させた結紮群、結紮6か月後に縫合糸を除去し1, 3, 6か月経過させた除去群を実験材料とした。グルタールアルデヒド灌流固定、顎骨をEDTA脱灰、パラフィン包埋標本の厚さ約3 μ mの連続切片を作製し